

徒然草

花は盛りに

① 花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。
桜の時だけ曇りがたいものだけものだろうか いや、そうではないだろう。

② 雨に向かひて月を恋ひ、たれこめて春の行方
向かつ恋しがり 見えないうつらや帳をおろして 引きこもつ 過ぎていくのも

知らぬも、なほあはれに情け探し。
ないの やはり情緒があり 趣深い

③ 咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、
今にも桜が そうなぐらい や もう 散りしおれ た が

見どころ多けれ。
が 多い

④ 歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、
参上し た のに

早く散り過ぎにければ。」とも、
もう てしまつた ので

⑤ 「さはることありて、まからで。」なども書けるは、
具合の悪い あつ 参上しま せんで と 書いた の

⑥ 「花を見て。」と言へるに劣れることかは。
言つ た もの 劣っている があろうか いや、劣っていない

⑦ 花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、
が 惜しむ 風習 もつともな である が

⑧ ことに 人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。
とりわけ もの情緒を解さない は や あ が 散つてしまつた

今は見どころなし。」などは言ふめる。
が ない と 言う ようだ

⑨ よろづ ^{どんな} のことも、初め終はりこそをかしけれ。 ^{おもしろい}

⑩ 男・女の情けも、ひとへに ^{情愛} あひ見る ^{一途に} をば ^{契りを結ぶ} 言ふ ^{ことだけよいものだといふ} ものかは ^{だろうか} ^{いや、そうではない}。

⑪ あは ^{男女が} で ^{契りを結ば} やみ ^{ないで終わつてしまつた} にし ^{辛さ} 憂さを思ひ、 ^{思い}

^{変わらない愛を誓いながら} ^{儚い} あだなる ^{約束} 契り ^{嘆き} を ^{長い} かこち、長き夜をひとり ^で 明かし、

⑫ 遠き ^{遠く} 雲居 ^{離れた所に} を ^に 思ひやり、浅茅 ^{思いを馳せ茅が生えている荒れ果てた家} が ^宿 ^{一緒に住んだこと} に昔をしのぶ ^{こそ、}

^{恋の情緒が分かる} 色好む ^{言える} とは ^{だろう} 言はめ。

⑬ 望月 ^{満月} の ^で くまなき ^{曇りが} を千里のほかまで眺めたるよりも、 ^{もの} ^{向こう} ^{ている}

⑭ 暁 ^{明け方} 近くなりて待出で ^{なつ} たるが、いと ^{やつと} 心深う、青み ^{待ち出} たる ^た やうに ^{とても} て、 ^{風情があつて青みを帯び}

^{深い} 深き山 ^{てい} の杉の梢に見えたる、 ^{様子や}

⑮ 木の間の影 ^{からもれるや} 、うちしぐれ ^{月光} たる ^{さつと時雨れ} むら雲隠れ ^た の ^{一群れの雲に隠れた} ほど、 ^{様子}

^{この上なく} またなく ^{しみじみとした趣がある} あはれなり。

⑯ 椎柴・白樫などの、ぬれ ^{てい} たる ^{よう} やうなる ^{葉の上にきらめき} たる ^{てい} こそ、 ^{もの}

⑰ 身に染み渡るよう ^{一緒に月を見る} で ^{しみじみとした味わいを理解する} 心あら ^{よう} ん ^友 も ^が なと、 ^{がいてくれたらなあ}

^{友がいる} 都 ^{恋しく} 恋しう ^{思われる} おぼゆれ。

⑱ すべて、月・花をば、さそのようのみにばかり 目でにて見るだろうか ものはいや、そうではない。

終助

出かけ

なくても

寢室

にい

月や花に

⑲ 春は家を立ち去ら思いを馳せていることはでも、月の夜は閨の内にながらも思ひへるこそ、

とても

期待が持たれ、

趣がある

いと たのもしう、をかしけれ。

教養が豊かな

ひたすら

おもしろがつている様子

⑳ よき

人は、ひとへに

好け

る

さまにも見えず、

副詞

おもしろがる様子

あつさりしている

興おもしろがるずる様子 さまも なほざりなり。

は

しつこく

全てのこと

おもしろがる

・ 片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興おもしろがるずれ。

にじり寄り

近づき

脇目

振ら

じつと見

・ 花のもとには、ねぢ寄にり 立ち寄にり、あからめも振らせず まもりて、

を

を

あげくの果て

に

大きな

を

折り取つ

てしまう

酒飲をみ、連歌して、果ては、大きな枝、心なく折をり取りぬ。

を

下り立つ

足跡つけ

をする

・ 泉には手・足さしひたして、雪には下り立下り立つちて跡足跡つけつけなど、

全て

距離を置いて

が

ない

よろづの全てもの、よそながら 見ることなし。

副